

十字架を恐れたドラキュラも 元はと言えばキリスト教徒だった

ドラキュラとフランケンシュタイン—デオダーティ荘

光 藤 俊 夫

セゾングループのアドバータイジング・デザインなどでもよく知られている石岡瑛子さんが映画『ドラキュラ』（フランス・フォード・コッポラ監督/1992）の衣装美術でアカデミー賞を獲得されたときのこと。一タお祝いの会が青山の“スパイラルホール”（楨文彦設計）で企てられ、浅葉克己、田中一光、三宅一生、横尾忠則諸氏らとともに発起人として名を連ねていた“佐賀町エキジビットスペース”のキューレーター小池一子さんから「一急なご連絡になりましたが」と、その案内状がFAXで届いた。そして曰く「当日、瑛子さんは『ドラキュラ』の世界からそのまま抜け出してきたような華麗な恰好で登場します。皆さんも、思っきり賑やかな、楽しい恰好で、お出かけ下さい」。こんな“お誘い”は嬉しい。よく「当日は平服でどうぞ」などと言うのがあるが、そう言って頂いて“安心”出来ることもある反面、そう何度も着ていない、しかしたまには着てみたいなどと思っている一張羅が、この時とばかりに遠慮せずとも着られるからだ。と言って相手が“ドラキュラ”なら、こちらは“フランケンシュタイン”とでも洒落なければ渡り合えない。みんな一体どんな恰好で？と、FAXを眺めながら、ひとときは楽しめたものだ。ところが

運悪く、当日は先約があり、実は残念ながら失礼せざるを得なかった。

あとで聞いた話では、そんな「一急な」ことであったにも拘わらず、

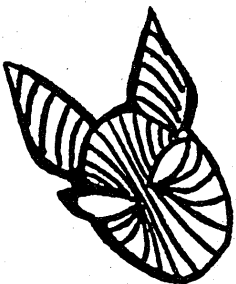
イラスト（上・下）は「石岡瑛子さんアカデミー賞受賞お祝いパーティーのお知らせ」に描かれていた（作者不詳）

大勢の人たちが駆けつけ、大層盛大であったそうだ。それはそうだろう。なにしろ「楽しい恰好で」来いと言う、こんなのは滅多にない種

類の催しであり、集まった連中は今をときめく国際的なグラフィック・デザイナーやイラストレーターたちが大半なら、きわめてファッショナブルかつ思っきり賑やかな“仮装大会”そのものであったはずだから。

もっとも、私は彼女とごく親しい知り合いというのではない。昔名刺を交わし合ったかと思うし、いろいろなパーティーで擦れ違ったりしてはいるものの、私が彼女を知っているほどに、彼女が私のことを知っていはいしまい。だからこの会に欠席したからと言って、特別に恨まれることもないのだが、それならそれで祝電の一本も打っておくべきだった。忘れました。今ここで改めて「おめでとうございます」と申し上げておく。

それはともかく、今更どうして“ドラキュラ”なのか。いよいよホラー物の種が尽きての復活か。それともあの魔人は“恨”の塊、とそう言えるところで、今日の世にますます広く大きく滞りを見せている種々の“恨”を見直すべく、それが象徴としてのものを解き明かしてみせようとの魂胆か。そう言えば、“ドラキュラ”は15世紀の半ば、ルーマニアはトランシルヴァニアを舞台に、残虐な施政で“串刺し公”の異名を轟かせたワラキアの君主、ヴラド・ツェペシュ（1431~76）がモデルであり、アイルランドはダブ





ヴラド・ツェペシュ像

(『ドラキュラ伯爵のこと』ニコラエ・ストイチェスク著
鈴木四郎他訳 恒文社 1980より)

リン生まれの作家ブラム・ストーカー (1847~1912) の怪奇小説によって世に知られることになった「魔人」だが、そんな「魔人」が誕生したヴィクトリア朝世紀末の様態が、20世紀末のそれに似たとことがあったためかも知れない。

ドラキュラ映画と言えば、何としてもイギリスのハマー・フィルム・プロダクションのものに定評がある。ドラキュラ役のクリストファー・リーとヴァン・ヘルシング教授役のピーター・カッシングが対決する、おどろおどろしたクライマックスのそれを、かつての松竹のドル箱『男はつらいよ』(山田洋次監督) の「寅さん」にはとてもかなわないものの、10本近くも作っているからだ。もちろん、1922年(大正11年)に、ほとんど初めて登場したドイツ映画『吸血鬼ノスフェラトゥ』(F.W. ムルナウ監督) 以来、今日に至るまで100本は下るまいとされている“ドラキュラ”なら、どれを選んで極め付きとするか、その全部を観たわけではなく、またその道のプロとて判断の下しようもないだろうが、私にとっては、リーとカッシングと言うのでなければ納得出来ないところがあるのだ。一で、中でも彼らの処女作とも言える『吸血鬼ドラキュラ』(テレンス・フィッシャー監督/1957) が光っている。第一分かり易いのがいい。ストーカーの原作もあらばこそ、古いお城に住む吸血鬼を抹殺しようとやって来る青年弁護士ジョナサン・ハーカーが、十字架とニンニク、それに敵の心臓に打ち込

む杭までも携え—という具合に幕を開けてしまうものだから、これはもう単純にして明快だ。そして“ドラキュラ”というのが一体何者なのか、また、ハーカーが何の為に命を賭し、しかもたった一人でそんな「魔人」に挑もうとするのかの説明は、もうご存じのはずとばかりに省略、さらには、ま、岩見重太郎の狒々退治(古いか?) だと思えばそれまでの善(神)と悪(魔)の闘い、どちらが勝かはすでにしてみえみえの物語なら、難しい理屈を抜きにしてご覧あれと“B級作品”の面目躍如たるところがあって嬉しい。

—とは言え、真紅の裏地を翻して現れるマント姿の“ドラキュラ”は凛々しく、またヘルシング教授のアクションもまことに知的かつ颯爽としていて頼もしい。加えて各シーンにおける19世紀末の風俗もよく描かれていた。そしてドラキュラ城のセットも、この一本だけで壊してしまうのは勿体ないと思えるほどに、ことにゴシック調にしつらえられたインテリアが豪華だった。そう言えば、同じハマー・プロで先行しての第一作、ベラ・ルゴシ主演の『魔人ドラキュラ』(トッド・ブラウニング監督/1931) での「ドラキュラ城」もじつに壮麗なものだったが、モノクロームであったにも拘わらず“色”が見えたほどだ。伝え聞くところによれば、このセット、後々の“ドラキュラ”物に何度も転用されたとか。



1922年に封切られたF.W. ムルナウ監督 マックス・シュレック主演のドイツ映画『吸血鬼ノスフェラトゥ』のドラキュラ(筆者描)

さて、フランシス・フォード・コッポラの『ドラキュラ』だ。原題に原作者の名が冠してあるように、これはブラム・ストーカーのそれにきわめて忠実、ということでも話題を呼んだ映画だ。なるほど、さきに挙げたものを例にとっても、主要な登場人物の名はそのままでも、それぞれの役柄が微妙に変えられており、また筋書きも「原作」そのままというのはほとんど無く、ときに換骨奪胎もはなはだしい粗雑な描き方のものも少なくなかった。その中ではフランク・タンジェラの吸血鬼『ドラキュラ』（ジョン・バダム監督／1979）がまあまあの線を行っていたと思うのだが、これとても最後にローレンス・オリヴィエ扮するヘルシング教授が、まったくあべこべのかたちで、“ドラキュラ”に奪われての“杭”に刺し殺されてしまうなどは、やはりオリジナルと大きく違っている。

それにしても“ドラキュラ”をテーマにしたものではないさか冗漫と思える情景描写が執拗に繰り返される上に、それが大長編であってみれば、これを要領よく“絵”に仕立ててみせるのは中々至難なこと、それでいろいろと省略、そして改編されねばならないのは、他のものの場合以上に厄介なことには違いない。問題はどうか確に「省略」し、どう巧みに「改編」するかだ。商業的にはせいぜい2時間前後に納めなければならないこととの兼ね合いが難しい。その意味では、主演女優ウィノナ・ライダーが惚れ込みコッポラが進んでメガホンを取るようになったジェームズ・V・ハートのシナリオによるこれは、今までのものとは違う、つまりはドラキュラ（ゲイリー・オールドマン）が実在の人物であったというシーンから始めながらも、「原作」での趣を上手にかいつまんで見せ、したがって真実味のあるまともな構成を持つ傑作だと言えるのだろう。なるほど画面は重く、また暗く、さもありなと思わせる背景と共に、審美的かつ条理的に展開されるそれは、映画の“嘘”を感じさせないほどの迫力があり、観応えがある。しかも単なる怪奇物というのではなく、ラブ・ロマンスにまで昇華させているのが心憎い演出だ。ただ一つ、私には気に入らないところがある。“ドラキュラ”のトレード・マークとでも言うべき「真紅の裏地」を持つ黒い「マント」を纏っていないかったことだ。「アカデミー賞」の才女に逆らうわけでは決してない。グスタフ・クリムトのそれを思わせるような艶やかな彩色の経帷子にしる、黒い「裏地」の真っ赤なガウン（これは意識してのパロディか）にしるみんな



フランケンシュタイン像（筆者描）

豪華で素晴らしい。「衣装はセットだ」と言ったコッポラにちゃんと応えてみせたいずれも秀作揃いだ。—がしかし、そう、「マント」を翻し、「真紅の裏地」がちらりと見える、そんなシーンが一つくらいあって欲しかった。これ、“B級”物の“ドラキュラ”に親しみ過ぎたせい、いや、彼の魔術にすでに冒されてしまったせいかしら—。

ちなみに、“ドラキュラ”物のパロディとして、ジョージ・ハミルトンの『ドラキュラ都へ行く』（スタン・ドラゴティ監督／1979）があり、和製のそれでは緒方拳の怪演が何とも言えない『咬みつきたい』（金子修介監督／1991）がある。どちらも良く出来たシナリオだとは思いますが、ことにも前者はホラー・コメディの傑作だと言える。

そこで、対抗上から言っても、あの“フランケンシュタイン”を取り上げねばならないが、この物語も、実は“ドラキュラ”と同じ出自と言えるものなのだ。

イギリスはロマン派の詩人パーシー・ビッシュ・シェリー（1792～1822）と駆け落ちし、彼の詩友であるジョージ・ゴードン・バイロン（1788～1824）の、レマン湖にある館、デオダーティ荘に身を寄せたメアリー・シェリー（1797～1851）は、ここでのひと時に『フランケンシュタイン』の構想を練り上げている。1816年6月のことだ。そして本格的な執筆に取り掛かり、2年後の3月、やがて舞台劇として人気を高めることになる『フランケンシュタイ

『ゾーあるいは現代のプロメテウス』が出版されたのだった。そして、これを最初に映画化したのが、かのトーマス・エジソン (1847~1931) だと言うのだから驚く。そう、いわゆる“活動写真”のさらなる発展を期しての題材として、まさにうってつけのものだったのだろう。もっとも、この映画は現存せず、どんな風なものだったのか類推してみることも叶わないらしい。一で、そのこととは特別な関係はないものの、ちょうどエジソンがこの世を去った年に、ボリス・カーロフの『フランケンシュタイン』(ジェームズ・ホエール監督/1931) が制作、封切りされているのは何かの因縁と言うべきか。そう言えば、あの『ドラキュラ』も前述の通り、実はシェリーが“フランケンシュタイン”を構想した時も場所も同じバイロン卿の館において、当のバイロンがメモしていたものを土台にして、バイロン卿とは主治医、またホモ・セクシュアルな関係にあったジョン・ポリドリが後に出版した『吸血鬼』が、そもそもの母体であることや、さきの『魔人ドラキュラ』が、やはり1931年のお目見えというのも、これまた怪しく符牒めいている。それで、その「1816年6月」のバイロン卿の館「デオダーティ荘」での様子を映画化したものが『ゴシック』(ケン・ラッセル監督/1986) や『幽霊伝説』(アイバン・パッサー監督/1988)、あるいは『幻の城』(ゴンザロ・スアレス監督/1988) だ。当然のことながら、スイスのレマン湖畔の情景、そしてシヨン城などがロケ地に選ばれているのだが、内容についてはそれぞれ特異な解釈が施されていて、どれがオリジナルで、どれがリメイクと言えるものか観きわめ難い。そんな、いわば競作スタイルの3本を続けて観るなら、人物設定での比較や史実との対照など取り混ぜ楽しめるのが嬉しいところだが、とくに大方の舞台となる「デオダーティ荘」のしつらいに、この物語への監督たちの思い入れがよく窺え興味深いものがある。

ところで、“フランケンシュタイン”とは、ボリス・カーロフ扮するモンスターの名ではなく、「モンスター」を創り上げた人物の名であり、原作ではスイスの若い研究学徒だ。しかし、『フランケンシュタイン』の後に、同じ監督による『フランケンシュタインの花嫁』(1935) や『フランケンシュタインの逆襲』(テレンス・フィッシャー監督/1957) などの題名に惑わされてか、「モンスター」の名こそがそうだと思いこんでいる人の方が多い。それに後者では『吸血鬼ドラキュラ』でのヴァン・ヘルシング教授役の

老長けたピーター・カッシングがフランケンシュタイン博士を演じたりしたものだから、誰も「博士」が「若き研究学徒」などとも思っていない。まあ、このことに関しては、小説は小説、映画は映画だ。「若き一」であろうと「老長けた」であろうとどうしても、小説を読んでから映画を観るか、映画を観てから原作を読むか、そんな楽しみも追加出来るというものだ。

それにしても“ドラキュラ”と“フランケンシュタイン”は西欧での「モンスター」の双璧だ。これに『狼男』(ジョージ・ワグナー監督/1941) が加われば完璧ということになるが、その後の怪奇物に大きな影響を与え続けた「怪物」は、彼らをおいて他に無いと言えるだろう。片や過去の人物が墓場から蘇り、片や人の手によって人間が創り出されるという、いわば過去からのものと未来でのものが象徴されている物語の中でのおぞましさは、考えてみれば、この手のものの基本みたいなものだ。コミカルに怖がらせた香港映画『靈幻道士』(サモ・ハン・キンポー制作総指揮、リッキー・リュウ監督/1985) シリーズの“キョンシー”、またシド・ミードがデザインした未来都市の装置でも話題を投げかけた『ブレード・ランナー』(リドリー・スコット監督/1982) での“レプリカント”など、“ドラキュラ”や“フランケン”の焼き直しと言えなくもない。また『フランケンシュタイン』のパロディ物も少なくない。中でも、メル・ブルックス監督、ジーン・ワイルダー主演の『ヤング・フランケンシュタイン』(1975) とチャールズ・バートン監督、アボットとコステロ主演の『凸凹フランケンシュタインの巻』(1948) などが印象に残っている。どちらも喜劇仕立てではあるが、前者は“古城”のセットが元祖『フランケンシュタイン』のそれよりもずっとよく出来ていて、これは建築学的(?)にも楽しめ、後者には、なんとあの本家ベラ・ルゴシが“ドラキュラ”で、またそれが持ち役だったロン・チェイニー・ジュニアが“狼男”でそれぞれ特別出演していて、楽屋落ちのおかしみも添えられている。

(みつふじ としお 生活機構研究科生活機構学専攻)